様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 10 日現在

機関番号：10101
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2011 年度　～　2012 年度
課題番号：23820001
研究課題名（和文）　未解明ワ族支系に対する記述言語学的研究

研究課題名（英文）　A descriptive study on unreported branches of the Wa people

研究代表者
山田　敦士（YAMADA　ATSUSHI）
北海道大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：20609094

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的は、中国雲南省孟連県に分布する未解明ワ族支系の言語状況を明らかにすることである。二年間の研究期間において、孟連県に居住（あるいは出身）のワ族支系に対するフィールド調査を実施し、主にヴォやルヴィア集団に対する言語学的一次資料および社会言語学的な情報を収集した。収集された資料に基づき、ヴォ方言の音韻体系および基礎語彙について、また中国における正書法の状況について、それぞれ成果を公開した。

研究成果の概要（英文）：
The aim of this study is to reveal languages of unreported branches of the Wa people in Menglian county of Yunnan province, China. We conducted some field surveys on the Wa people living in (or originated from) Menglian county. The result of these surveys, we collected primary linguistic data and socio-linguistic information about Vo and Luvia groups. Based on these data, we reported the phonological system of the Vo dialect with basic vocabularies on the Journal of Burma Studies. We also contributed the paper about the Wa orthography used in China to the Journal of Hokkaido Ethnological Society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2012 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：人文学・言語学
キーワード：ワ族、フィールド言語学、少数民族、民族言語学

１．研究開始当初の背景

中国雲南省には、多数民族である漢族のほか、言語系統の異なるいくつかの非漢系少数民族（モン・クメール系、タイ系、チベット・ビルマ系、ミャオ・ヤオ系）がモザイク状に分布している。中国国内におけるこれら非漢系民族を対象にした言語研究は、建国後の 1950 年代に始まった。しかし、相次ぐ政治的混乱の影響で、調査研究が順調に発展することはなかった。当時の研究成果は 80 年代になって公刊された一連のモノグラフ（『語言簡志』民族出版社）にみることができる。これは今日に至るまで、当地の民族言語文化研究の基礎をなすものとして重要な位置づ

けにある。しかし、当時の研究枠組みがほぼ政治的意味での「民族」に規定されていること、研究が漢言語文化という「大伝統」の視点を抜け出せないことといった問題があり、民族言語の事実を十分に汲みとったものにはなっていない。今日も、特定のテーマ（声調発生に関する歴史音韻論的考察など）において散発的に言及されることを除くと、諸民族言語をめぐる学術的な状況は概して低調なままおかれている。その一方で、近年の国民国家形成にともなう漢族の圧倒的な政治的・経済的優位性の確立によって、少数民族の生活基盤、共通文化圏は大きく揺るがされ、その伝統的な言語文化、社会、価値観を急速に変容させている。特に、当地の最古層の住人と推定されるモン・クメール系民族は、今日まで報告さえなされていないものが数多く存在しており、したがって、言語文化に対する広範囲の資料・情報収集が急務となっている。

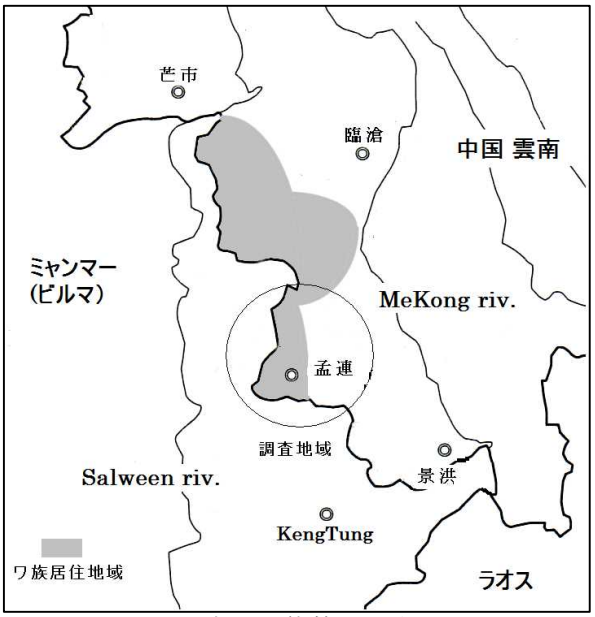
以上のような研究背景のもと、申請者は1998 年よりこれまで、モン・クメール系民族の言語を対象とした調査・研究に取り組んできた。モン・クメール系民族の多くはアクセスの難しい辺境地域に散在していることもあり、国外の研究者にとってはアクセスの難しい存在である。このような状況にかんがみ、申請者は 1998 年 9 月から翌年 8 月にかけての現地教育研究機関への留学滞在、また 2003 年 10 月から翌年 10 月にかけての国際交流基金アジアセンターの公募事業（平成 15 年度「次世代リーダーフェローシップ」プログラム）による訪問研究滞在などをとおして、モン・クメール系民族を調査・研究する環境を整えてきた。2006 年からは、日本学術振興会特別研究員（DC、PD）や東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員などとして、継続的に調査・研究をおこなってきた。一連の調査・研究の成果は、別紙に示すとおり、国内外の様々な場において論文報告、発表をおこなっている。しかし、当該民族の多くが広域に分散しているという状況、さらに申請者が世界的にも唯一のフィールド調査従事者であるという現状を考えると、当該民族言語に対する研究が質的・量的ともに不足していることは明らかである。課題の規模やその性質からも、今後とも長期的視野に立ち、計画的に調査・研究に取り組んでいく必要がある。

２．研究の目的

本研究は、これまでの申請者自身の調査・研究を継承、発展させるかたちでおこなわれるものである。具体的には、これまで一定の研究蓄積の得られている「パラウク」を自称とするワ族集団と地域的、また言語文化的に対照的な存在と認められる孟連タイ族ラフ族ワ族自治県（以下、孟連県）および西盟ワ族自治県（以下、西盟県）のワ族集団を対象とする（下図参照）。自称パラウクの集団は、当地の北側一帯に広く分布し、その人口規模と分布範囲の大きさから、当地モン・クメール系民族の威信的存在とみなされている。申請者のこれまでの調査では、集団内部に多くの言語的変種が存在することが判明している。このことは、J. G. Scott（*Gazetteer of Upper Burma and the Shan States*. 5 vols. Rangoon, 1900-1901）など初期の報告・資料において指摘されるところの、平地民であるタイ族や漢族との交渉の長い歴史を物語る。一方で、西盟県から孟連県にまたがる当地の南側一帯には Wild Wa（Scott ibid.）と称される、言語文化的に保守的とされるワ族集団が居住する。このうち孟連県および西盟県南部の Wild Wa については、これまでまとまった調査報告もなされておらず、詳しい実態は不明なままである。申請者は 2004 年 7 月と 2006 年 3 月に現地文化局の協力のもと、いくつかの村落を訪問し、予備的な調査を実施している。この調査インフラを十分に生かし、当該地域における民族言語の実態を解明することが本研究の目的である。

３．研究の方法

本研究はフィールド調査を主たる研究方法とする。調査地は、未解明のワ族支系の分布する中国雲南省孟連県および隣接する西盟県南部とする。また比較・対照的観点から、近接する滄源、瀾滄、孟海の各県などでの調査も視野に入れる。



フィールド調査は具体的に、次の三つの工程でおこなうものとする。

(1)調査票（約 2000 の語彙、約 250 の例文）に基づく、語彙情報および文法情報の収集

(2)言語運用の情報を得るための口述テキス

ト（会話、民話伝説、口承文芸など）の収集

(3)言語使用に関する社会言語学的情報、画像・映像を含めた民族言語学的資料の収集

各村落における調査協力の依頼に関しては、かねてより関係を深めてきた孟連県人民政府文化局および農業局の協力を仰ぐものとする。

フィールド調査以外の期間では、収集された一次資料の整理・分析作業をおこなう。特に言語の運用解明に資する口述テキスト（音声資料として収集）について、文字化をおこない、情報資源化をすすめる。

本研究を遂行するに際しては、現地の教育・研究機関や研究者の協力が必要となる。申請者は、1998-1999 年と 2003-2004 年の雲南省の省都昆明市への留学滞在・訪問研究滞在などを通して、雲南民族大学および雲南省民族研究所などの研究教育機関、また自治県内の人民政府各機関などと良好な関係を築いてきた。過去 10 年間の現地調査は、これらの機関はもとより、中国モン・クメール系言語研究の第一人者である雲南省民族研究所の王敬騮教授（すでに退職）と自らが民族出身でもある雲南民族学院民語系の趙岩社教授の強い支援と協力の下におこなわれた。緊急時の対応までも含め、これら現地研究者との人的ネットワークを重視しながら調査・研究をすすめていく。

また言語記述を効果的にすすめるためには、他言語を対象とする研究者からの視点も欠かせない。例えば、ひとつの言語を対象としている研究において看過しがちな言語現象の重要性を喚起するうえでも重要である。そこで、他言語を対象に記述言語学的成果を発表している国内の研究者と言語記述の方策に関する打合せを密におこない、限られた期間での成果達成のための効率的な研究方法について検討を重ねることとする。言語の記述的研究は個人的な研究とみなされがちであるが、研究者間の情報交換・共有は記述言語学全体の発展のためにも重要である。

４．研究成果

(1) 平成 23 年度の活動成果

研究計画初年度にあたる平成 23 年度は、中国雲南省に散在する未解明ワ系民族のうち、孟連県北部および北西部に居住するワ族支系に対するフィールド調査を重点的におこなった。孟連県北部および北西部には、これまで未解明であったヴォやアルヴィアなどの集団が居住している。フィールド調査では、これらの民族集団の言語的概観を得るとともに、社会言語学的な情報の把握に努めた。フィールド調査以外の期間は、これまでに収集されたものも含め、言語資料の整理および分析に努めた。特に、威信的方言であるパラウク集団との比較・対照資料の作成をすすめた。

研究計画初年度には、具体的な成果物として、ワ族全体の文字表記にかんする現状報告、および正書法とワ語諸方言の関係についての考察（「ワ語方言からみた正書法」『北海道民族学』所収、「中国雲南省ワ族の文字使用に関する社会言語学的考察」北海道民族学会における口頭発表）をおこなった。これらはワ族の歴史動態解明のみならず、無文字社会における表記を考えるという点においても、少なからぬ意義をもつものと考えられる。

(2) 平成 24 年度の活動成果

研究計画第二年度である平成 24 年度は、前年度を引き継ぐかたちで、特にヴォ支系に対するフィールド調査に取り組んだ。また、研究計画最終年度であることを踏まえ、将来的な現地還元に向けた基盤づくりにも取り組んだ。

フィールド調査では、孟連県よりタイ王国チェンマイ県内へ移住したヴォ支系を対象に、基礎語彙および文法情報の収集、民話テキストの収集をおこなった。このタイ王国において収集された言語資料と前年度に孟連県において収集した言語資料を比較・対照するなかで、例えば母音の折れや副音節の消失といった言語変化の状況を確認することができた。このような点と点の関係を積み重ねることは、当該民族言語の全体像解明に不可欠な作業といえる。これまでに研究蓄積のあるパラウク支系の言語を含め、諸方言（または変異体）の比較・対照をすすめているところである。

一連の調査研究成果について、将来的には現地へと還元されるべきと考える。こうした観点から、これまで収集した資料を如何に現地社会に還元すべきかという課題についても取り組んでいる。具体的には、中国国内における少数民族教育の現状と言語政策について文献調査をおこない、少数民族言語教育教材の検討・作成に取り掛かった。二年間の調査活動において、現行の正書法表記が孟連県において全く普及していないことが判明した。そこで、音声情報をつけるかたちでの副教材を構想し、現在、テキストの選定および編集をすすめているところである。活動を実りあるものとすすために、今後とも現地政府・教育機関との対話をすすめていかなければならない。

研究計画最終年度は、その具体的な成果物として、孟連県北部に居住する未解明のヴォ支系についての音韻記述（Phonological Outline of the Vo Dialect, *Journal of Burma Studies* 所収）を発表した。これは国内外の隣接分野からの強い要請を受けたものであり、基礎語彙資料も併せて公開してい

る。また、本研究活動の社会的意義を広く知らせることも重要であると考え、海外フィールド調査にかかわるシンポジウムに参加し、フィールドの現状および今後の展望についての報告（「フィールド言語学と言語資料：中国雲南省ワ族のフィールドワークから」海外学術調査ワークショップにおける招待講演）をおこなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）
①Atsushi Yamada（2013：印刷中）
Phonological Outline of the Vo Dialect, *The Journal of Burma Studies*, vol. 17. pp.61-80.（査読有）
②山田敦士（2012）「ワ語方言からみた正書法」『北海道民族学』8 号、pp.27-34. （査読有）

〔学会発表〕（計 2 件）
①山田敦士（2012）「フィールド言語学と言語資料：中国雲南省ワ族のフィールドワークから」、海外学術調査ワークショップ（招待講演）、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、6 月 30 日.
②山田敦士（2011）「中国雲南省ワ族の文字使用に関する社会言語学的考察」、北海道民族学会、函館市地域交流まちづくりセンター、11 月 13 日.

６．研究組織
(1)研究代表者
山田　敦士（YAMADA　ATSUSHI）
北海道大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：20609094

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：